

しもきた学講座

斗南藩基礎講座

第9回 藩士の活躍 小池毅と橋爪陽

日時 令和5年12月21日(木) 18:30～
場所 下北文化会館大集会室
講師 地域史研究家 三浦 順一郎



小池 毅

主催 むつ下北未来創造協議会事務局

斗南藩基礎講座

第9回 藩士の活躍 小池毅と橋爪陽

地域史研究家

三浦 順一郎

1. はじめに

論語に「有殺身以成仁(身を殺して以て仁を成すこと有り)」(巻第八 衛霊公第十五)の文言がある。意味は「志しのある人や仁の人は、命惜しさに仁徳を害するようなことはしない。時には命をすてても仁徳を成しとげる」である。自己を犠牲にして、人のために尽くすことという。

そんな人が会津藩士にいた。その一人は侍医であった。斗南に移住し、最初は城ヶ沢に居住していた。病弱の妻のために暖地の脇野沢に移った。しかし、そこで妻は死去した。廃藩置県後に会津に帰らず、北海道の無医村の歌棄に再移住し、へき地医療にあたった。

また、歌棄で生まれた息子は父の意志を引き継ぎ、医学の道に進んだ。台湾にペストが発生した時、自らの生命を惜しまず治療と防疫に従事した。医療中にペストに感染して若くして死んだ。将来を嘱望された伝染病研究者であった。

さらに、もう一人いた。広島県東広島市西条上市町に1基の胸像が建てられてある。胸像が建てられたほどだから相当な功績をあげた人である。その人も会津藩士の子として生まれ、田名部で育った。彼は広島県の東広島市でどんな仕事をしたのであろうか。

2. 医師も斗南に移住した

斗南に移住したのは藩士だけでない。医師も移住した。小池求真という侍医がいた。

(1)小池求真

明治 3年(1870) 斗南に移住した(城ヶ沢)

*明治3年10月の斗南ヶ丘移住藩士戸主名簿(城ヶ沢に居住)に小池求真の名前がある。

明治 4年(1871) 城ヶ沢から暖かい脇野沢に移転した。そこで妻のきえが死去した

「光源院遍譽妙意大姉 明治四未歳二月二日 小池求真女房」(悦心院の過去帳)

求真は廃藩置県後に会津に帰らず、へき地の医療に尽くすことにした。

明治 4年(1871) 北海道歌棄郡有戸村に医師として再移住(長男精一・二男精次郎と共に)

明治 6年(1873) 会津藩士有賀英樹の姉の多美を娶る

明治16年(1883) 死去

(2)小池 毅

明治 7年(1874) 歌棄で誕生

明治21年(1888) 函館の弥生小学校高等科卒業

明治23年(1890) 東京済生会学舎に入学

明治26年(1893) 東京済生会学舎卒業 陸軍三等軍医

明治27年(1894) 北里柴三郎の伝染病研究所に入所

ペスト病の研究に励む

研究結果を『^{こくしびょう}黒死病』、『^{べす と きん さ だ ん}百斯篤菌瑣談』の

著書にまとめる

明治30年(1897) 台湾にペスト病大流行 医療にあたる

明治31年(1898) ペストに感染し、台北の病院で殉職 24歳



小池毅の墓

12月に立待岬に墓を建立

「ならぬことはならぬ」

毅はペスト病の根源が師の北里柴三郎の説と違うことに気付いていた。しかし、世界初のペスト菌発見者の師に、当初は異を唱えなかった。その後、間違いは正さなければ医学の進歩はない、という精神で自説を撤回した。毅の死後、日本にペスト菌が上陸した。ペストの原因は毅が主張していたグラム陰性菌であることが確認された。柴三郎は自説の誤りを認めた。学者としての偉さを感じる。

3. 広島県酒に貢献した

(1)橋爪 陽

陽は広島県酒の三恩人の一人として称えられた人物である。斗南藩士橋爪寅之介の長男として田名部で生まれた。東京工業高等学校(現東京工業大学)を卒業して、国(大蔵省)の醸造技師として広島県の醸造試験場に赴任した。その後広島県の醸造技師となって、酒米の開発に力を発揮し、広島県酒の酒質向上のために尽力した。彼の御蔭で西条の酒が全国品評会で多くの優等賞を受賞した。



①橋爪家(徳玄寺)の墓碑から



右から
橋爪寅之介夫妻之墓(父母)
橋爪 陽夫妻之墓
橋爪幸枝之墓(弟)
橋爪管治之墓(祖父母)

○橋爪寅之介夫妻之墓

明治三十九年十一月十六日卒 妻テフ子 全十八年八月十日卒

後妻テイ子 大正十三年十一月廿日卒 昭和十三年十一月十六日 橋爪陽建之

○橋爪 陽夫妻之墓 橋爪陽 昭和十九年四月十二日卒 妻フミ大正七年二月十五日卒

○橋爪幸枝之墓 明治三十九年四月八日卒 行年二十九歳

○橋爪管治之墓 明治十三年三月十四日 同妻之墓 明治廿一年五月十日

②橋爪寅之介

父の寅之介は明治6年から同8年まで田名部小学の教師を務めた。その後下北郡役所に勤めた。一時期ではあるが下北郡長代理を務めたこともあった。

寅之介(号芳城)は書に長けて、招魂祭の幟に戦死者名を揮毫した(「会津藩戦死者人名掛幅の1幅」)。

③橋爪陽の経歴

- 明治 9年(1876) 2月24日、寅之介・テフの子として誕生する
明治13年(1880) 「戊辰戦死者拾三回忌招魂祭」に4歳5ヶ月の陽も「幼勇」と書く
祖父の橋爪管治が死去
明治18年(1885) 母テフが死去
明治21年(1888) 祖母が死去
明治35年(1902) 東京高等工業学校(現 東京工業大学)の応用化学科を卒業する
広島県の広島税務管理局技手として赴任する
明治39年(1906) 4月、弟の橋爪幸枝が死去(行年29歳)。11月、父寅之助が死去
明治40年(1907) 同局鑑定部長となる。

謹厳実直の精神

陽は他県への異動を拒否して酒の研究に励んだ。国の技師は数年で異動する決まりがあった。異動を拒否すれば給料が下がる。それを陽は気にしなかった。広島県酒の酒質向上から離れる気はなかった。陽は西条で醸造のために働いた。広島市から西条へ二時間もかけて通勤した。今は一時間で行ける。研究で遅くなると試験場に寝泊りしたという。自分を犠牲にして人のために尽くした。謹厳実直の気風は会津精神の表れである。

- 明治43年(1910) 広島県工業技師となる
大正 7年(1918) 妻フミが死去
大正11年(1922) 広島県醸造試験場初代場長。県立西条農事試験場で酒米の開発に力を発揮した。後に西条の酒が全国品評会で多くの優等賞を受賞した
大正13年(1924) 継母テイ死去
昭和 4年(1929) 広島県醸造試験場西条清酒支場長として着任する
昭和13年(1938) 父の33回忌に、陽は父母の墓を徳玄寺に建てる
昭和19年(1944) 4月11日、陽が肺炎で死去、68歳
昭和31年(1956) 陽のブロンズの胸像が建つ(西条市の西条酒造会館)
平成22年(2010) 広島県東広島市の松木津々二が「ニッポンの酒」で橋爪陽を紹介する
平成27年(2015) 「西条酒蔵通りの街をつくった三世代の産業功績者」に、橋爪陽が採り上げられる
「西条酒蔵通り歴史庭園」に、橋爪陽の治績を紹介するコーナーを設ける

陽の胸像は当初は西条清酒醸造場の玄関前に設置された。製作費は全県下の酒造家からの寄付によって賄われた。その後東広島市西条朝日町の西条酒造組合会館前に移転された。現在は東広島市西条上市町の西条清酒醸造場跡の加茂泉酒造(株)酒泉館玄関に移転されてある。

広島県酒の三恩人

- | | |
|-------------------|--------------|
| ○三浦仙三郎(1847～1908) | 軟水醸造法を生み出した |
| ○木村静彦(1864～1946) | 酒造業の近代化を促進 |
| ○橋爪 陽(1876～1944) | 広島酒の酒質向上に努めた |

三浦 仙三郎



東広島市安芸津町 榊山八幡宮

木村 静彦



東広島市西条町西条 御建神社

橋爪 陽



東広島市西条町朝日町 西条酒造協会

コアな西条酒蔵通り情報誌 「くぐり門」より

4. おわりに

小池毅と橋爪陽は信念をもった人物である。「有殺身以成仁(身を殺して以て仁を成すこと有り)」を実践した。会津藩士の士の掟の「ならぬものはならぬ」を貫き通した。また東北人の我慢強さを示した。

東広島市で橋爪陽の顕彰がなされている。しかし、小池毅は、活動期間が短かったこと、函館の活動が少なかったこと等が原因で、知名度が低い。毅はもっと喧伝されていい人物である。

◇参考文献

- 小池 明 『会津医魂』 歴史春秋出版株式会社
- 斎藤與一郎 『非魚放談』 幻洋社
- 永田青雲 『道南の碑』 幻洋社
- 松木津々二 『ニッポンの酒』 自費出版
- 東広島郷土史研究会 『西条酒蔵通りの町をつくった 三世代の産業功績者』
- コアな西条酒蔵通り情報誌 「くぐり門」
- 池田明子 『吟醸酒を創った男』 時事通信社
- 三浦順一郎 『斗南の人たち』 自費出版

資料1

陸軍二等軍醫正七位勳六等 小池毅墓碑

(原文)

小池君諱毅父名求真爲舊會津藩待醫母同藩士有賀氏三女也君幼時在小學以秀才顯年十六負笈游東京入濟生學舍學醫三年而卒業後從北里博士攻黴菌學爲傳染病研究所助手征清役起也君任陸軍三等軍醫敍正八位尋進二等軍醫敍正七位役畢以功敍勳六等賜瑞寶章及金若干并從軍記章翌年一月奉命至臺灣在新竹及臺北衛戍病院當比時臺地惡疫流行兵士多死君專擔任傳染病室及病理試驗室朝夕出入猛毒瀰蔓之間拮据奮勵多所救濟矣又加生蕃地探檢隊跋涉山川銳意研究斯道欲以明前人未發之原理而益後世也纂一書曰早斯篤菌鎖談其他著書數十部其功績偉矣猶將大有爲不幸爲惡疫所侵侵竟卒享年僅二十有四實明治三十一年二月廿八日也君以前途多望之身遂斃其職猶將士之斃炮丸也可謂忠烈矣人皆深悼惜焉是歲四月十六日葬於函館尻澤邊墓地建碑以表其墓

余嘗識君揮淚書其梗概

明治三十一年十二月 小川景義撰并書

(訓讀文)

小池君、諱は毅、父の名は求真、旧会津藩待医爲り。母は同藩士の有賀氏の三女なり。君幼時小学に在るや、秀才を以て
顕る。年十六、笈を負いて東京に遊び、濟生學舎に入りて医を学び、三年にして卒業す。後、北里博士に従いて黴菌学攻め、
伝染病研究所助手と爲る。征清の役起るや、君は陸軍三等軍医に任ぜられ、正八位叙せらる。尋いで二等軍医に進み、正
七位に叙せられる。役畢り、功を以て勲六等に叙せられ、瑞宝章及び金若干、並びに従軍記章を賜わる。翌年一月、命を奉
じて台湾に至り、新竹及び台北の衛戍病院に在り。比の時に当たり、台地は悪疫流行し兵士は多く死す。君は専ら伝染病
室、及び病理試験室を担当し、朝夕、猛毒瀰蔓の間に入出し、拮据奮勵して、救済する所多し。又生蕃地の探検隊に加わり、
山川を跋涉し、銳意斯道を研究す。以て前人未発の原理を明らかにして、後世を益せんと欲せしなり。一書を纂して、
早斯篤菌鎖談と曰う。其の他著書数十部、其の功績偉なり。猶將に大いに為すこと有らんとするも、不幸にして悪疫の侵す
所と爲り、竟に卒す。享年僅か二十有四にして、実に明治三十一年二月廿八日なり。君は前途多望の身を以て、遂に其の職
に斃るるは、猶將士の炮丸に斃るるがごときなり。忠烈と謂うべし。人皆深く悼惜せり。是の歳四月十六日、函館の尻沢辺
墓地に葬り、碑を建て以て其の墓に表す。余嘗て君を識り、涙を揮つて其の梗概を書す。

明治三十一年十二月 小川景義撰し並びに書す。



橋爪陽の胸像